
■ 第4編 平成25年度調査結果の概要

調査項目別の平成25年度調査結果の概要について表4-1に示した。

表4-1 工事11年次の環境モニタリング調査の概要

分野	大項目	中項目	詳細項目	目的	平成25年度調査結果概要	報告書 参照ページ
地形	干潟地形 調査	地形測量 (陸上部)	航空レーザー計測、カラ ー航空写真撮影	干潟地形の変化 を把握	<ul style="list-style-type: none"> ・ 朔望平均干潮位による干潟の面積は、平成25年10月に約902,000m²、平成26年3月に約928,000m²であり、平成25年3月以降、出水の影響によって面積が減少したものの、平成26年3月には増加する傾向が見られた。 ・ 年平均干潮位による干潟の面積は、平成25年10月に約401,000m²、平成26年3月に約425,000m²であり、平成26年3月の面積は平成16年11月の大出水による干潟面積の縮小以降で最大から2番目の大きさとなった。 ・ 平成25年3月と平成25年10月を比較すると、河川部に浸食の傾向、河口干潟東側では堆積と洗掘の両方の傾向が見られ、平成25年10月と平成26年3月を比較すると、広い範囲で堆積の傾向が見られた。 	第3編 第2章
		深淺測量 (水中部)	河川横断測量			
基盤 環境	干潟部基盤 環境調査	干潟部分 (陸上部) 春季、秋季 調査	測位、地盤高計測、表層 粒度組成 193地点／2回	干潟上の生息環 境における物理 環境を把握	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地盤高は、河口干潟、住吉干潟ともに大きな変化は見られなかった。 ・ 事業開始時より、河口干潟の粒度組成は砂分が主体の干潟であり、住吉干潟の粒度組成は泥分が主体の干潟であることが継続している。 	第3編 第3章
鳥類	指標種生息 状況調査	干潟全域 対象 春季、秋季	種名、個体数 4地点／4回	鳥類の生息状況 を把握	<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査区域で確認されたシギ科・チドリ科の鳥類は、出現種類数は17種、出現個体数は延べ6,611個体であり、平成17,18,20,24年度と同程度であるものの、平成21,22,23年度に比べると少ない結果となった。 ・ 主な出現種は、過年度同様にハマシギ、シロチドリ、ダイゼンであった。 ・ エリア別にみると、種数、個体数共に、エリア②が他のエリアに比較して多い。 	第3編 第4章
		飛翔状況 調査 春季、秋季	種名、個体数、行動目的、 飛翔高度、飛翔経路 1地点／4回（架橋）	構造物の有無に よる鳥の飛翔形 態の把握	<ul style="list-style-type: none"> ・ シギ科・チドリ科の阿波しらさぎ大橋での飛翔高度は、工事前に比べて高くなることが認められた。特に、経年変化を見ると平成21年度までと、それ以降では飛翔高度の利用状況の変化が明瞭であり、0～10mの飛翔高度から15m以上を飛翔するようになった。 ・ シギ科・チドリ科と同様に阿波しらさぎ大橋での飛翔高度が低い傾向が認められていた、カモ目、カモメ科においても、飛翔高度が高くなる傾向が認められた。 ・ 飛翔経路の経年的な傾向は、シギ科・チドリ科とも、架橋地点を通過する場合の経路は、中央のエリア「ロ」が架橋される前から、干潟寄りのエリア「イ」で通過個体が多く、従来から通路は干潟側を中心に利用している事がわかる。エリア「イ」の架橋工事の進行による飛翔経路の変化はなく、現時点で橋梁建設による影響は認められない。 	
		吉野川河口 両岸 春季、秋季	種名、個体数、飛翔経路 7地点／4回 阿波しらさぎ大橋で1地 点、左岸側で3地点、右 岸側で3地点	吉野川河口への 飛来・飛去状況を 把握	<ul style="list-style-type: none"> ・ 吉野川河口における鳥類の飛来・飛去は、断面別にみると、阿波しらさぎ大橋と吉野川河口と海の境界付近では、飛去する個体が、飛来する個体より多く、左岸側と右岸側では飛来する個体が、飛去する個体より多い結果であった。 ・ シギ科・チドリ科に着目すると、吉野川河口と海の境界付近を通過する割合が最も多かった。 ・ 吉野川河口域に飛来・飛去するシギ科・チドリ科の鳥類のうち、平成25年度では全体の43.4%が阿波しらさぎ大橋を横断していた。最も多く横断した断面は吉野川河口と海の境界であり、52.1%であった。残りの4.4%は吉野川の両岸上を横断していた。 	